

第2節 友だち関係・異性関係

1. 友だちの数

いずれの学校段階でも、男子において「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」や「悩みごとを相談できる友だち」の数が増加傾向にある。

◆友だちの数は男子で顕著な増加

ここからは、子どもたちの友だち関係についての項目を取り上げる。図1-2-1～図1-2-3は、子どもたちが「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」「悩みごとを相談できる友だち」の数を示したものである。

性別でみると、男子で顕著な変化がみられる。「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」では小学生男子と高校生男子において、「11人以上」が大きく増加している。とくに高校生男子では26.2%（2004年）→35.6%（2009年）へと、10ポイント近く増えている。

「悩みごとを相談できる友だち」も、いずれの学校段階でも男子では「いない」や「1～3人」が減少し、「4～10人」「11人以上」が増加している。女子でも増加傾向はみられるが、男子ほど顕著な変化ではない。

このように、友だちの数はとくに男子で増加している。背景はさまざまであろうが、1つには遊び方の変化もあるのではないだろうか。第2章第1節では、ゲームで遊ぶ時間が2004年よりも長くなっていることが指摘されている。グループインタビューでも、ほとんどの男子が「友だちと集まってゲームをやる」「通信できるゲー

ムで遊んでいる」などと話していた。屋内でも戸外でも、同じゲームを持った男の子同士で集まり、対戦や通信をする。そういった遊び方の普及が、友だちの数に影響を及ぼす1つの要因であるとも考えられる。

また、次項で詳しく検討するが、男子がこの5年間で、友だち関係により気をつかうようになってきている。男子にとっての友だちのあり方が変質してきているようである。

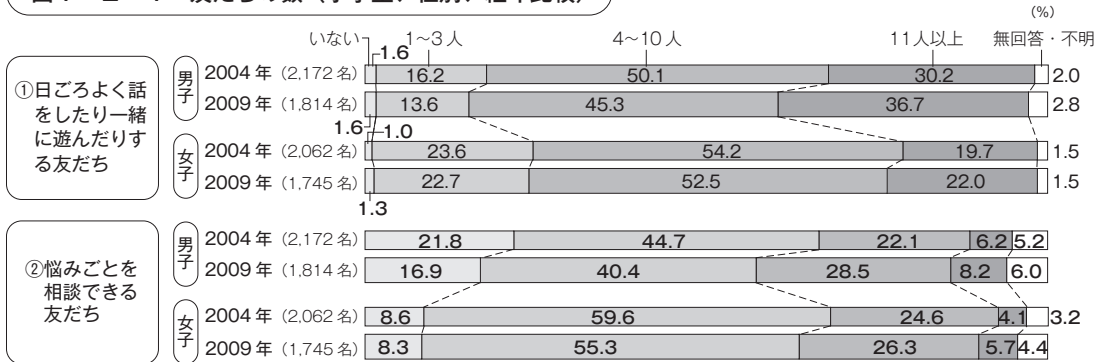
◆異性とのつきあい経験があるのは、

中学生で約3割、高校生で約5割

図1-2-4は、つきあっている異性（彼氏や彼女）がいるかどうかをたずねた結果である。中学生では現在つきあっている異性が「いる」が10.3%、「以前はいたが今はいない」が20.6%で、合わせて約3割の生徒がこれまでにつきあった経験があると回答している。

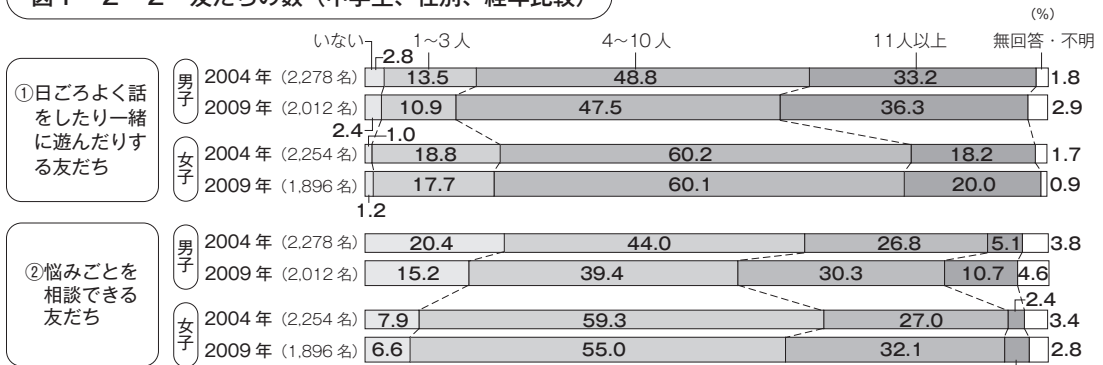
高校生では、現在「いる」が16.6%、「以前はいたが今はいない」が34.5%で、合わせて約5割の生徒に異性とのつきあい経験がある。これらの数値には、2004年から大きな変化はみられない。

図1-2-1 友だちの数（小学生、性別、経年比較）



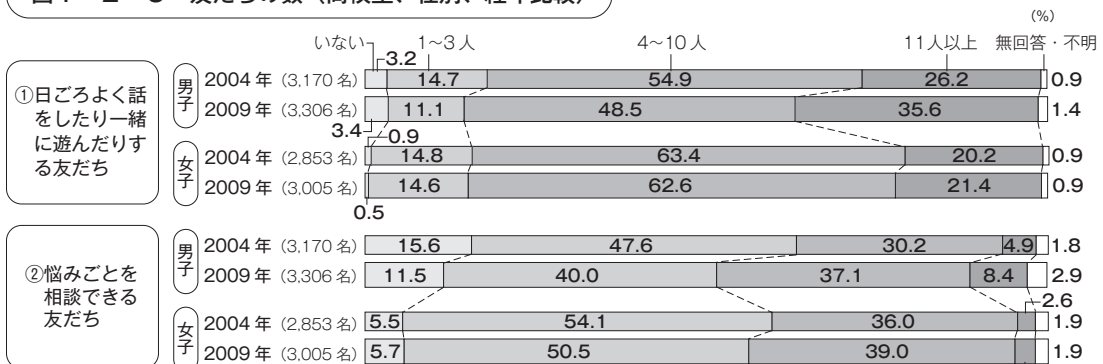
注) 「1~3人」は「1人」+「2~3人」、「4~10人」は「4~6人」+「7~10人」、「11人以上」は「11~20人」+「21人以上」。

図1-2-2 友だちの数（中学生、性別、経年比較）



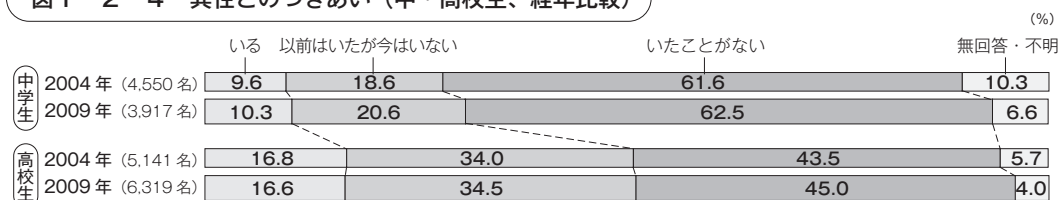
注) 「1~3人」は「1人」+「2~3人」、「4~10人」は「4~6人」+「7~10人」、「11人以上」は「11~20人」+「21人以上」。

図1-2-3 友だちの数（高校生、性別、経年比較）



注) 「1~3人」は「1人」+「2~3人」、「4~10人」は「4~6人」+「7~10人」、「11人以上」は「11~20人」+「21人以上」。

図1-2-4 異性とのつきあい（中・高校生、経年比較）



注) 中・高校生のみにたずねている。2004年の高校生では、一部の学校で「無回答・不明」が多かったため、学校単位で集計から除外している。

2. 友だちとのかかわり

2004年からの変化をみると、男子がより友だち関係に気をつかうようになっている。また、「成績が悪いと親にしかられるから」勉強している子どもは、友だち関係においても不安や傷つく経験が多いことがわかった。

◆友だち関係に気をつかう傾向に。

性別による差は小さくなった

表1-2-1～表1-2-3は、友だちとのかかわりについて、「とてもそう」「まあそう」と回答した合計比率を示したものである。

まずは小学生(表1-2-1)をみてみよう。男子では、「友だちといつも一緒にいたい」「違う意見をもった人とも仲よくできる」「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」の4項目で、2004年より5ポイント以上増加している。一方女子では、「友だちが悪いことをしたときに注意する」のみ増加した。この結果、性別による差が小さくなったり、逆転したりした項目も多い。とくに「グループの仲間同士で固まっていたい」は、2009年では男子が女子を大きく上回った(男子56.7%>女子48.3%)。

つづいて中学生(表1-2-2)の男子では、「友だちが悪いことをしたときに注意をする」が5.7ポイント、「友だちといつも一緒にいたい」「年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい」「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」がそれぞれ数ポイント増加し、小学生と同様の傾向がみられる。女子では「グループの仲間同士で固まっ

ていたい」「友だちと話が合わないと不安に感じる」が減少した。この結果、2009年の「グループの仲間同士で固まっていたい」(男子54.8%>女子46.9%)、「仲間はずれにされないように話を合わせる」(男子46.3%>女子42.4%)では、男子が女子を上回った。

高校生(表1-2-3)でも、男子は小・中学生の場合と同様の変化をしている。女子では大きな変化はみられない。

このように、男子の友だち関係はこの5年間で変化してきたことがわかる。それでも表1-2-1～表1-2-3のなかには女子の数値が高い項目が多く存在し、中学生の「友だちとのやりとりで傷つくことが多い」は男子より8.3ポイントも多くなっている。女子のほうが人間関係を重視する傾向がまだあるとはいえ、男子においても友だち関係の凝集性が高まり、仲間はずれにならないことが重要になっているのかもしれない。こうした傾向は、一方でコミュニケーション力が高くなっているととらえることもできるが、他方で親子関係(第1章第1節)や現状・将来についての意識(第4章)のデータと合わせて考えると、内向き志向になっているようにも受け取れる。

表1-2-1 友だちとのかかわり（小学生、性別、経年比較）

(%)

	小学生全体		男子		女子	
	2004年 (4,240名)	2009年 (3,561名)	2004年 (2,172名)	2009年 (1,814名)	2004年 (2,062名)	2009年 (1,745名)
友だちといつも一緒にいたい	81.8	85.3	77.9	< 82.9	86.1	87.9
違う意見をもった人とも仲よくできる	70.1	74.9	68.4	< 75.2	72.0	74.7
友だちが悪いことをしたときに注意する	60.0	< 65.3	57.6	62.2	62.4	< 68.5
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	53.2	54.5	47.2	49.8	59.6	59.6
グループの仲間同士で固まっていたい	46.2	< 52.5	47.4	< 56.7	45.0	48.3
仲間はずれにされないように話を合わせる	46.7	51.6	44.6	< 50.4	49.0	52.9
友だちと話が合わない不安を感じる	46.9	47.0	42.2	44.5	51.9	49.4
友だちとのやりとりで傷つくことが多い	—	27.1	—	25.7	—	28.8

注1) 「とてもそう」＋「まあそう」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があることを示す。

表1-2-2 友だちとのかかわり（中学生、性別、経年比較）

(%)

	中学生全体		男子		女子	
	2004年 (4,550名)	2009年 (3,917名)	2004年 (2,278名)	2009年 (2,012名)	2004年 (2,254名)	2009年 (1,896名)
友だちといつも一緒にいたい	78.2	77.8	73.2	76.2	83.3	79.6
違う意見をもった人とも仲よくできる	71.4	73.7	70.9	73.1	71.9	74.2
友だちが悪いことをしたときに注意する	49.7	54.5	44.5	< 50.2	54.9	59.2
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	51.2	53.6	46.2	49.2	56.0	58.0
グループの仲間同士で固まっていたい	51.9	50.9	51.6	54.8	52.0	> 46.9
仲間はずれにされないように話を合わせる	43.3	44.4	41.9	46.3	44.6	42.4
友だちと話が合わない不安を感じる	41.0	36.1	36.6	35.6	45.3	> 36.8
友だちとのやりとりで傷つくことが多い	—	24.4	—	20.3	—	28.6

注1) 「とてもそう」＋「まあそう」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があることを示す。

表1-2-3 友だちとのかかわり（高校生、性別、経年比較）

(%)

	高校生全体		男子		女子	
	2004年 (6,051名)	2009年 (6,319名)	2004年 (3,170名)	2009年 (3,306名)	2004年 (2,853名)	2009年 (3,005名)
友だちといつも一緒にいたい	70.2	71.2	67.7	71.6	73.0	70.7
違う意見をもった人とも仲よくできる	73.7	78.5	72.2	< 77.7	75.5	79.6
友だちが悪いことをしたときに注意する	54.8	58.4	49.6	< 55.0	60.5	62.1
年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい	59.3	60.2	55.0	59.5	64.1	61.1
グループの仲間同士で固まっていたい	40.7	43.8	43.0	< 48.7	38.1	38.3
仲間はずれにされないように話を合わせる	39.1	41.1	39.9	43.3	38.1	38.7
友だちと話が合わない不安を感じる	37.2	34.9	35.5	34.8	38.9	34.9
友だちとのやりとりで傷つくことが多い	—	24.1	—	22.6	—	25.9

注1) 「とてもそう」＋「まあそう」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があることを示す。

第1章 子どもをとりまく人間関係

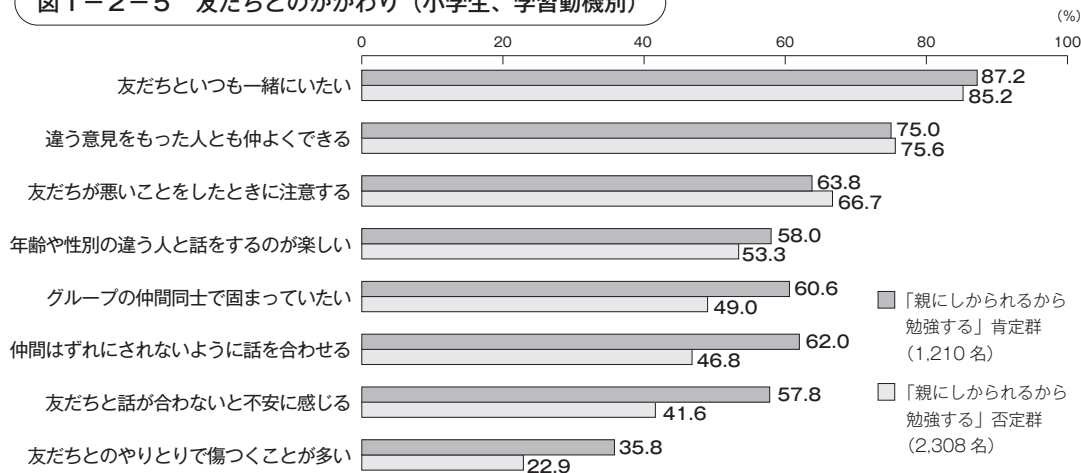
◆「親にしかられるから勉強する」子どもは
友だちにも気配り

最後に経年比較を離れて、親子関係への気づかいと友だち関係への気づかひの関連を探ってみたい。「勉強する理由」についてたずねた質問のなかに、「成績が悪いと親にしかられるから」という項目がある（「勉強する理由」の詳細な分析は第3章第2節を参照）。この質問に対して「そう」（「とてもそう」＋「まあそう」）と回答したのは小学生34.0%、中学生43.7%、高校生34.0%であるが、この項目は親のかかわりに気をつかいながら行動する傾向を示していると考えられることができる。この項目と友だちとのかかわりとの関連を示したのが、図1-2-5～図1-2-7である。

これを見ると、いずれの学校段階でも「親にしかられるから勉強する」とする子どものほうが、「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」「友だちと話が合わないと不安になる」「友だちとのやりとりで傷つくことが多い」の数値が高い。中・高校生では「友だちといつも一緒にいたい」でも5ポイント以上の差がみられる。

疎外されることや否定されることに敏感な子どもは、保護者に対しても友だちに対してもともとも気をつけていることが推察される。限られた分析ではあるが、親密な人間関係のなかで、傷つかないように懸命に周囲に合わせようとする子どもの姿が浮かび上がる。

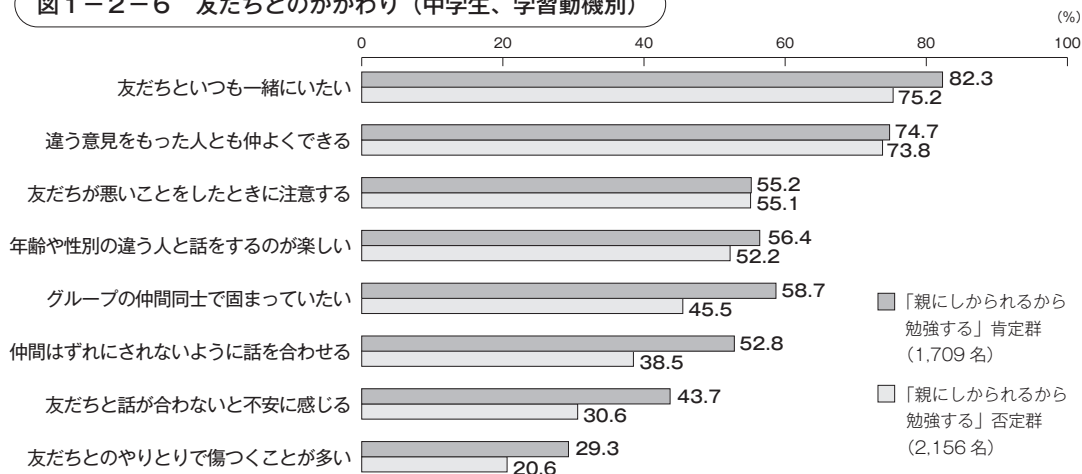
図1-2-5 友だちとのかかわり（小学生、学習動機別）



注1) 「成績が悪いと親にしかられるから」に「とてもそう」「まあそう」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」肯定群、「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」否定群とした。

注2) 「とてもそう」＋「まあそう」の%。

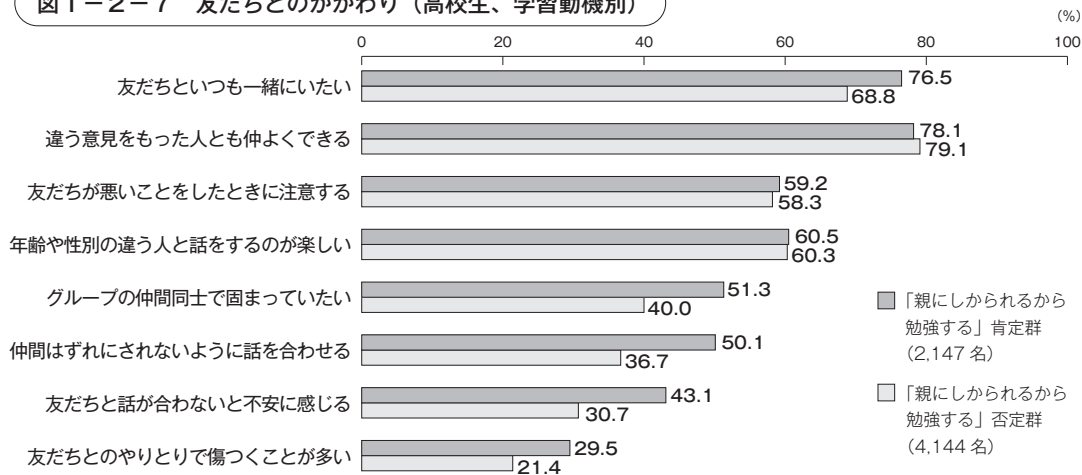
図1-2-6 友だちとのかかわり（中学生、学習動機別）



注1) 「成績が悪いと親にしかられるから」に「とてもそう」「まあそう」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」肯定群、「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」否定群とした。

注2) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

図1-2-7 友だちとのかかわり（高校生、学習動機別）



注1) 「成績が悪いと親にしかられるから」に「とてもそう」「まあそう」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」肯定群、「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」と回答した人を「親にしかられるから勉強する」否定群とした。

注2) 「とてもそう」+「まあそう」の%。